

OCHADAI GAZETTE

お茶の水女子大学学报 第251号 2017年2月13日

OCHADAI GAZETTE Spring, 2017



全ての女性に 学びの場を提供することをミッションとして

CONTENTS

TOPICS

- | | |
|---|--|
| 学長からのメッセージ…………… 1-2
全ての女性に学びの場を提供することを
ミッションとして | 附属学校園からのお知らせ…………… 7-8 |
| 学生のアクティビティ…………… 3-4 | キャンパス点描…………… 9-10 |
| 教員紹介…………… 5
● 宮下 聡子先生
(基幹研究院人文科学系) | ● 女性研究者のグラスシーリングを破る
～工学系女性研究者がいつそう輝ける社会に向けて～
シンポジウム/ワークショップを開催しました |
| 卒業生紹介…………… 6
● 戸井 智子さん
(理学部化学科卒業) | ● お茶の水女子大学附属幼稚園が創立百四十周年
記念式典を挙行了しました |
| | ● ケネディ駐日米国大使が本学を訪問されました |



お茶の水女子大学
Ochanomizu University

学長からのメッセージ

全ての女性に学びの場を提供することをミッションとして



お茶の水女子大学は、皆さんもご存知のように、女性のための日本初の官立の高等教育機関として設立され、その後141年にわたって、女子教育の先達として道を切り拓いてきた大学です。これまでに、数多くの女性たちが、学びたいという強い意欲を持って本学に集い、学術研究、教育、産業、行政、報道など、多様な場に羽ばたいて行きました。卒業生達が各方面で活躍し、社会のために、人々の幸せのために貢献してくれることは、私たちにとって大きな誇りです。

2004年の国立大学法人化に先立って、本学では、国立の女子大学はどうあるべきかを議論し、その存在意義を確認すると共に、当時の本田和子学長の下で、『学ぶ意欲のある全ての女性にとって、真摯な夢の実現の場として存在する』とのミッションを掲げ、世界中の全ての女性たちの夢の実現を支援することを目指しました。世界には、学びたくても学ぶことのできない女性たちが沢山居ます。特に、開発途上国では、多くの女性たちが様々な理由から、学びの道を閉ざされています。本学は、そういった女性たちをも含めて、国籍や年齢を問わず、女性たちの成長と資質能力の開発を支援する活動を開始したのです。

本稿では、法人化を機に、本学が推進してきた女性支援策のうち、保育所の設置と開発途上国の女性支援の取り組みを紹介します。

子育て支援策から始めよう ～ 学内保育所の設置に向けて

女性達が夢を持って多様な分野で活躍し、仕事を続けて行く上で、出産と育児が制約となることが多く、女性たちが家庭を持って仕事を継続できる環境を作るためには、周囲の積極的な協力と努力が不可欠です。

私たちは、2000年初頭に、学生や女性研究者の子育て支援のために、本学に学内保育所を作りました。本学で学び、働く若い女性たちにとって、学内保育所があれば、研究や教育活動を続けて行く上で大きな助けになるはずで、現在では大学や研究機関に保育所を設置する事が当たり前になりつつあり、政府もそれを積極的に支援していますが、当時は様々な課題があって、学内保育所の設置は簡単には進まなかったのです。

発端は、1999年秋に開催された日本学術会議の細胞生物学研究連絡委員会でした。そこで群馬大学の委員の方から「病院付設の保育所の増築を検討している」と聞いた私は、「国立の女子大学として女子教育の先頭に立つはずのお茶の水女子大学に、なぜ若い女性たちを支援するための保育所がないのだろうか」と素朴な疑問を持ちました。そこで「本学にも、子育て支援のための

保育所を作りませんか」と周囲に呼び掛けました。ところが「国立大学で保育所を設置できるのは、厚生省（現・厚生労働省）の施設である病院を持つ大学だけ。医学部も病院もないお茶の水女子大学に厚生省の施設を作るのは無理」とか、「居住地から離れた大学内に保育所を作っても役に立たない」など、反対意見が多かったのです。でも、反対意見が多い中で、理学部の評議員だった松本勲武教授（現・名誉教授）が賛同して下さって、直ちに当時の佐藤保学長にアポイントをとって、2人でご相談に伺うことになりました。佐藤学長は「これまでも提案はありましたが、いつも立ち消えになっていました。なぜ無理だったかを探るために、他の国立大学の現状を調査して下さい」と仰って下さいました。そこで力を得た私たちは、先ず全国99の国立大学（現在は86大学）に電話をかけて、保育所についての情報を集めました。ある大学では「お宅には病院もないのだから保育所設置など無理でしょう」と、けんもほろろに電話を切られましたが、今でも忘れられないのは、北海道大学の厚生課の方、金沢大学の厚生課の方と保育園長さんの親切な対応と励ましです。その方々の優しさに押されて、99の国立大学全ての電話調査を終えることができ、その後、まとめた資料を各大学に送って、間違いや誤解を訂正して頂き、当時の西川恵子助手にお手伝い頂きながら、調査報告をまとめることが出来ました。

佐藤学長はその報告を国立大学協会での議論に供して下さり（国大協「国立大学における男女共同参画を推進するために 報告書」2000年）、学内に「保育施設に関する調査研究会」を、次いで「設置準備委員会」を組織して下さいました。私の研究室の若い研究者や学生たちの協力の下、全学的なアンケート調査も実施し、学内の需要や要望も調べ上げました。準備委員会で具体的な案が練られ始めた頃に、文部省（現：文部科学省）が「霞ヶ関保育所」を作る計画を公表し、それが後押しになって「無理だ」との意見は鳴りを潜めることとなりました。

2001年4月に佐藤学長からバトンを引き継がれた本学初の女性学長である本田和子学長は、保育所設置に熱心に取り組んで下さいました。先ず、授乳とオムツ替えができる明るい授乳室が出来上がり、株式会社サンリオから寄付して頂いた可愛いベッドやソファ、布団などが設置されました。赤ちゃんを連れて





来ても、安心して授乳やオムツ替えが出来ることは、若い母親にとって、とても嬉しいことでした。

本田学長は児童学がご専門であったこともあって、「幼・保連携」の方針をお持ちでした。そして先ず、保育施設を幼稚園の空き部屋を利用して設置することについて検討が始まり、紆余曲折はあったものの、2002年に幼稚園の一角に「いずみ保育所」が出来上がりました。「いずみ」には「成長の源」の意味が込められています。病院を持たない国立大学で初めての保育所でした。安全な赤ちゃん用の家具や布団などは株式会社サンリオから、また玩具は株式会社ベネッセコーポレーション(当時)からご寄付頂き、いかにも可愛い「赤ちゃんたちのための部屋」が出来上がりました。

さらにその後、本田学長のご指示の下、乏しい学内予算をやりくりして、2004年に職員宿舎の一部を改装した新しい保育施設が出来上がり、さらに経営の安定化のために、2005年度からは附属学校部所属の「いずみナーサリー」として開所の運びとなりました。

現在は、学生や大学院生、教職員などの子どもたち二十数名が学内で保育されています。幼稚園から大学院までが同じキャンパスにある本学にナーサリーが加わり、“赤ちゃんがいるキャンパス”は、学生たちに様々な年齢の子ども達と触れ合う機会を提供し、優れた教育機会となっています。さらに「いずみ」で子育てをしている学部生と大学院生には、保育料の半額を奨学金として授与する仕組みも作られています。某企業の経営者の方から、この仕組みを「他にはない素晴らしい制度」と、とてもほめて頂きました。

なお、この時期に私と一緒に活動してくれた若い女性研究者が「いずみ」で子育てをし、その後、他の国立大学に異動して、現在、准教授として教育・研究に励むと共に、当該大学での男女共同参画において顕著な活躍をしています。それが国外からも高く評価され、大きな賞を獲得しましたが、これは本学の活動の副産物としても嬉しい実績です。

なお本年4月から、文京区との連携で「認定子ども園」を設置しました。そして、様々な形態の幼児教育施設をひとつのキャンパスに備えた保育と幼児教育の研究と実践の場として、子ども達に豊かな教育環境を作るための努力を続けています。

法人化を機とした女性支援策の推進 ～ 全ての女性たちの活躍を支援しよう

子育て支援の取組と同時に、『学ぶ意欲のある全ての女性にとって、真摯な夢の実現の場として存在する』とのミッションの下、

本学では、全国に先駆けて「女性支援室」を設置して男女共同参画の取り組みを開始しました。第一期中期目標・計画(2004年度～2009年度)の中には「女性のライフスタイルに即応した多様な研究形態を確立して、研究支援を図る」ことを明記し、女性支援室を中心に「女性と仕事の未来館」や「国立女性教育会館」、また他の女子大学との連携を推進して、多様な女性のためのキャリアアップや就労支援のためのプログラム作成や、相談の受け皿作りなどを実施して来ました。

これらの活動は、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学に呼びかけて2002年から開始した「アフガニスタン女子教育支援事業」に端を発しています。アフガニスタンをはじめとする開発途上国の女子教育支援事業を進め、女子教育を通じた国際協力を推進するための拠点として「開発途上国女子教育協力センター」を設置し、その中に「女子教育協力研究部門」と「幼児教育協力研究部門」の2分野を置いて、途上国における女子教育と幼児教育への協力と支援を推進して来ました。この活動は、女性の視点から途上国独特の問題の解決に向けた方策や政策提言を行うことを可能とし、途上国における女性の地位の向上に資することにも繋がっています。また世界各地で弱者として虐げられている女性や子どもたちの幸せのための本学発の貢献事業として、JICA、UNESCO、UNICEFなどの国際協力機関やNGOの協力も得て、活動を続けて来ました。

こうした活動は、本学に集う全ての人々がそれぞれの夢を実現し、豊かな未来と希望を創造することができることを願い、また勇気をもって課題に向き合うことを願って続けられているものです。今年2016年度から、国立大学法人は「第三期中期目標・計画期間」に入りました。本学ではこれを機に、法人化後にミッションとして掲げてきた「グローバル女性リーダーの育成」に加えて、「人が一生を通じて心身ともに健康で幸せに暮らせるための研究と教育の推進」を新たな目標として掲げ、これまで以上に多様な女性達の活躍を支援することを目指しています。そして141年の歴史と伝統を持つ高等教育機関として、優れた女性人材を育成し、社会に輩出するために、更なる努力を重ねて行きたいと願っています。

2017年2月
学長 室伏 きみ子



学長からのメッセージ

学生のアクティビティ

11月23日に行われたGGJ EXPO『グローバル人材育成フォーラム』に
本学から初めてファイナリストチームに選ばれた
White Water Dropsにインタビューしてきました!!

White Water Drops



1 まずグループ名の由来について教えてください

グループ名は、「お茶大」と「大会テーマ」、そしてプロジェクトの舞台となった「清澄白河」とをうまくミックスさせて表現ができた方がいいなと思って考えました。Whiteは清澄白河の「白」、Waterはお茶の水女子大学の「水」、Dropsはしずくという意味ですが、大会テーマの中に、「草の根レベル」でプロジェクトを創出するということが入っていたので、どんな河も小さな水の一滴から始まるように、Deep Japan Internshipも、私たちの小さな取り組みから始めていき、グローバル社会につながる地域社会ネットワークとして、もっともっと大きくしていこうという願いを込めました。

2 プレゼンテーションの内容は??

私たちは「より良いグローバル社会」を自らの国籍にかかわらず相互理解を深め、個々人の才能を活かしながら協働できる社会であると考えました。そこで日本における留学生の就職難を解決する為に『Deep Japan Internship (DJI)』という企画を提案しました。DJIを通して、留学生は商店街でのインターンシップを行い、生活文化を含めた日本文化の深淵を体験し、地域でのアイデンティティを形成することができます。また、留学生の企画力、実行力、コミュニケーション力、チームで働く力等を身につけることができる為、企業の求める人材の育成を行うことができると発表しました。

3 苦勞したことや頑張ったことは??

勉強やほかの活動との両立はもちろんのこと、準備を進める中でやむを得ない事情によりメンバーが脱退したことや、3人も専攻が異なるため作業の時間を合わせることが大変でした。また、夏には企画のために清澄白河へ足を運び、在住の方にインタビューをしたり、商店街組合の理事長様と企画実行のために交渉をしたりと緊張の連続でもありましたが、皆さん快く留学生インターンシップを引き受けてくださいました。プロジェクトを全面的にサポートくださった深川江戸資料館通り商店街の皆様には本当に感謝しております。

4 参加して良かったこと、得たことは??

一番はたくさんの方と出会えたことです。普段出会うことができないような多くの人々に出会えたことで、本当に楽しく、やりがいを強く感じることができました。プロジェクトに賛同し、インターン生を受け入れてくださった商店街の皆様、留学生の皆様、英語プレゼンに全面的にサポートくださった先生方。そして、最初から最後まで一緒に戦い抜いてくれたWhite Water Dropsのメンバーとこのようにプレゼンができ、本当に良かったです。またチームでなにか一つのものを作り上げることのやりがいや達成感を味わうことができたことも今回得られたことのひとつで、チームメンバーとは大変なことも一緒に乗り越え、この大会を通じて強い絆を築くことができました。



写真提供：中央大学

「グローバル人材育成フォーラムとは？」

『グローバル人材育成フォーラム』は、学生、大学のグローバル化を促進することを目的に開催しており、今年度で4回目を迎えます。18大学から選抜された8大学の学生チームによる「グローバル社会につながる地域社会ネットワーク」をテーマに、予選を通過した大学の学生チームが、英語でプレゼンテーションを行います。

日本の大学生と国内外の地域社会が草の根レベルで一体となり、より良いグローバル社会の実現を目指すプロジェクトを、学生ならではの視点で提案するものです。

5 最後に皆さんの今後の目標について教えてください



大垣さん
← リーガミニ

英語プレゼンテーションの決勝のステージに立つまでに、様々な壁にぶち当たりました。それでも諦めることなく続けたことで、多くのことを学び、一生記憶に残る素晴らしい経験ができたと感じております。

来年の夏に長期留学を予定しているので、留学先でもチャレンジ精神を大切に積極的に行動していきたいです。



坂口さん
←

私生活の上ではプレゼンで培った積極性と課題解決力を勉強・就職活動その他において忘れず、実践していきたいと思っています。そして何より、このプレゼンで立ち上げた企画「Deep Japan Internship」をよりしっかりした体制に整え、後世でも本校で続けてもらえるようなものに昇華させたいです。



坂東さん
←

大学生活での今後の大きな目標としては、お茶大生や他大の学生と共に、今まで以上に英語のスキルを磨いていくことです。

卒業後は中学校もしくは高等学校の英語教師になり、人と人との繋がりの大切さ、そして、グローバルな視点を持ち、自分たちから行動していくことの大切さを未来の生徒たちに伝えていきたいです。

White Water Dropsメンバー

大垣 志織 さん

文教育学部人文科学科地理学コース 2年

坂口 早瑛 さん

文教育学部人文科学科比較歴史学コース 2年

坂東 恵 さん

文教育学部言語文化学科英語圏言語文化コース 2年



学生のアクティビティ

教員紹介

今回は、基幹研究院人文科学系助教の宮下聡子先生をご紹介します。宮下先生は大学院では比較社会文化学専攻思想文化学コース、学部では文教育学部人文科学科哲学・倫理学・美術史コースにご所属です。



Miyashita Satoko
宮下 聡子

倫理・心理・宗教という三者の視点から、人間のあり方を考えるパイオニア研究者に

人間の内面と超越的次元を視野におさめることはきわめて重要と考えていますが、先行研究はあまりなく、正にパイオニア的な立ち位置です。研究を通じて、あるいは研究と並行して、自分自身のあり方を振り返ったり人間のあり方全般について考えたりもしているので、私にとって思索は日常です。また最近では、道德教育にも関心があり、倫理学の研究成果を道德教育の実践に応用する道も模索しています。

Q ご出身、ご経歴をお聞かせください

千葉県千葉市出身です。地元の公立の小中、高等学校に通いました。小学生の頃から研究者になりたいという夢を持っていました。小学校高学年から中学にかけては考古学に興味を持ち、少年少女向けの考古学の本を読んだり、遺跡を見に行ったりして、将来は考古学者になりたいと思っていました。その後、多感な思春期を迎える中で、自分自身でも様々な悩みを抱え、悩みを持つ友人たちとも接するうちに、人間の心に強い関心もち、いつか研究してみたいと思うようになりました。高校卒業後、早稲田大学第一文学部(当時)に入学し、心理学を専攻しました。心理学の実験や調査を行い、心理検査や心理療法についても学んで、充実した学生生活を過ごしました。一方で、教養科目として履修した哲学の授業がとても面白く、文献研究によって人間の内面や人間のあり方について考えることの魅力に取り憑かれました。早稲田大学卒業後、人間の内面やあり方の問題に文献研究の手法で本格的に取り組んでみたいと思い、東京大学文学部に学士入学し、倫理学を専攻しました。卒業論文では、心理学と倫理学の接点に立つ思想家として、社会心理学者のエーリッヒ・フロムの思想を取り上げました。卒業後、主に心理学関係の書籍を出版している出版社に就職し、編集部勤務でしたが、倫理学を究めたいという思いが強くなって、1年で退職、東京大学大学院の修士課程に入学しました。関根清三先生にご指導をいただき、修士課程では精神科医C・G・ユングの思想を倫理学の観点から研究しました。ユングの思想を理解するためには、そ

の背景としてのキリスト教について知ることが必要不可欠でしたので、聖書やキリスト教の教えや文化についても力を入れて学びました。博士課程でも引き続きユングの思想に取り組み、博士論文「ユングにおける宗教的倫理の可能性」で博士号[博士(文学)]を取得しました(博士論文は、2009年に教文館より『ユングにおける悪と宗教的倫理』として出版)。博士課程修了後は、横浜国立大学非常勤講師を経て、東京大学で5年間助教を務め、お茶の水女子大学、青山学院大学、立教大学非常勤講師を経て、2014年4月にお茶の水女子大学に助教として着任いたしました。

Q 先生のご専門ご研究について教えてください

専門は、倫理学、特に西洋の倫理学です。ただ「倫理学」という枠組みにとらわれず、「倫理」と「心理」そして「宗教」の三者の接点を探るという視点から、人間のあり方について考察しています。研究対象は、倫理学と心理学と宗教論の境界に位置する思想家、すなわち人間のあり方に深い関心をいだき、超越的次元へのまなざしも有している心理学者や精神科医達です。これまで、ユングをはじめ、フロム、V・E・フランクル、エリザベス・キューブラー＝ロスの思想について研究しました。人間のあり方は思想家によってさまざまに提示されています。例えば、ユングは悪のコントロールを、フロムは生産的な生を、フランクルは意味に満ちた生を、キューブラー＝ロスは死の受容を人間のあり方として提示していますが、それぞれ、超越的な次元にその根拠や支えを求めています。私自身は、人間のあり方を考えるうえで、

Q お茶大の印象はどのようなお持ちですか？ また、お茶大生へのメッセージを頂けますか？

私自身は、幼稚園から大学院まで男女共学の環境で過ごしてまいりましたので、お茶大ではあらゆるものが新鮮です。キャンパス全体が実に和やかな雰囲気にも包まれているのを感じます。猫が好きなので、構内のそこかしこに猫がいる風景も大好きです。図書館に用がある時など、猫はどうしているかな、と思わず探して確認してしまいます。キャンパス全体の雰囲気と呼応して、授業風景も大変和やかだと思えます。和やかな雰囲気の中で、学生は自由に考え、思い思いに発言し、お互いがお互いの考えを尊重し、認め合っています。倫理学にとってそういう雰囲気はとても大切です。

お茶大生は、堅実な学生が多いと思います。授業に臨む姿勢はまじめで、人生設計も早くからしっかり立てていて、それに沿って着実に歩いていくタイプの学生が多いように見受けられます。また、発言や発表も臆せず堂々としており、コミュニケーション能力も総じて高いと思います。学生時代には、いろいろな機会をとらえて自分を磨き、卒業後は、知力と柔軟性をそなえた貴重な人材として、社会で活躍していかれることを期待しています。

文責：基幹研究院人文科学系
准教授 水村 真由美

卒業生紹介

生きものの命にかかわる

仕事がしたい ～薬をつくる～



Toi Satoko 戸井 智子

帝人ファーマ株式会社

神奈川県出身

1997年3月 お茶の水女子大学 理学部 化学科 卒業

1999年3月 お茶の水女子大学大学院 修士課程
人間文化研究科 物質化学専攻 修了

1999年4月 帝人株式会社 (のちに帝人ファーマ株式会社として分社化) 入社
東京研究センター勤務

2008年～2011年 岩国事業所勤務

2011年～ 本社勤務



フェブリク錠

化学を学んで

大学・大学院では理学部、化学科で有機化合物の合成法の開発を行ってきました。大学時代はインカレのテニスサークルで汗を流し、横浜市のアマチュアオーケストラでバイオリンを弾き、授業や実験以外の時間も忙しくしていました。大学院では有機化合物をどうやって作るかという研究を行い、有機化合物を作るということはたやすいことではありませんが、有用な医薬品の開発に必要なことであることを実感しました。このような研究を行っていき中で、「何かしら生きものの命にかかわる仕事がしたい、自分の手がけた研究が生きものの生命や生活を豊かにすることに繋がれば」と思うに至りました。そこで就職の際には、医薬品関係の会社を選択し、その中から、今の会社に就職しました。

最初の仕事

就職して最初に配属されたのは、初期物性評価といって、医薬品の候補となる物質が何に溶けるか、どのような性質を持っているかなどの基礎的な物理的・化学的性質を明らかにする部署でした。その性質によって、今後の医薬品としての性能や、錠剤・カプセル剤などどのような形のお薬にするかが決まってきます。

ここでの仕事の途中で、これから長い付き合いになる「フェブリク錠」という痛風のお薬と出会いました。痛風・高尿酸血症治療剤として世界で40年ぶりとなる新薬でした。

痛風は、体内に尿酸が増えることによりおこる病気です。尿酸値を下げる薬には、尿酸の生成を抑える「尿酸生成抑制薬」と尿酸の排泄を促す「尿酸排泄促進薬」があり、フェブリク錠は「尿酸生成抑制剤」に該当します。

生体内でプリン体を代謝し尿酸を産生する経路において、ヒポキサンチンからキサンチン、キサンチンから尿酸へ変換するキサンチンオキシダーゼの作用を強力に阻害すること

により、尿酸の生成を抑制し、血中及び尿中の尿酸濃度を低下させます。

フェブリク錠は従来のお薬では一日3回飲んでいただいていたところを一日1回にすることができ、QOL (生活の質: Quality of Life) も向上することができます。皆さんのご家族にも服用なさっている方がいらっしゃるかもしれませんね。

このお薬の日本での認可申請業務を担当することになり、発売の準備に向けて、製造工程に携わるようになりました。

スケールアップを目指す

お薬として販売するためには、申請した通りの厳しい製造工程の管理と安定的な供給が必要になってきます。実際の製造現場で、認可申請の業務や製造工程の立ち上げを任せられたわけですが、これまでは実験室レベルで少量での合成を行っていたのですが、大勢の人に行きわたる量を安定的に供給するためには大きなプラントスケールでの製造が必要になってきます。そのような大きな生産設備は山口県岩国市にあったため、これまで合成を行ってきた研究所のある東京都日野市との往復を繰り返しながら、プロジェクトチーム一丸となって製造を立ち上げ、発売の準備を完全に整えることができました。



岩国実験室

本社に戻って

無事にフェブリク錠の製造を立ち上げ、2011年には晴れて日本での製造販売承認を

取得することができましたが、販売量が順調に増えてくるにつれて供給が追いつかない状況になってきました。そこで現在は本社に移り、この薬の更なる安定供給を目指して新たな生産施設の探索や技術開発に取り組んでいます。

学生へのメッセージ

これまで薬の開発に携わり、様々なお仕事をしてきました。今まで行ってきた仕事は、化学の基礎的な知識が必要であることはもちろんなのですが、大学院で学んだ知識や研究テーマが直接的に業務で使えるかというと、そうではありません。でも、研究を行う中で壁に当たったときにどのように対処するか、どのように考えて物事を進めていくかといった思考は、何を行うときにも必要なことです。ですから、学生さんには今の研究を一生懸命、真剣に取り組んで、色々な経験を積んで欲しいと思います。その姿勢や経験は社会人になっても必ず役立ちます。社会人になってからも、専門が違うから、分からないからということ逃げずに、その時与えられた目の前のテーマを一生懸命やるのが重要だと思います。

また、大学時代の友達は一生の宝物です。同期の友人とは今でも年に1回ペースで会っています。色々な分野での友人の活躍は自分にとって大いに刺激・励みになっています。

文責：基幹研究院自然科学系
准教授 矢島 知子

わたしのオフタイム

休みの日は社内外の仲間とゴルフを楽しんでいます。またワインエキスパートの資格を取得し、おいしいワインと食事とおしゃべりで仕事の疲れを解消しています。

附属学校園からのお知らせ いずみナーサリー便り



「ただいま〜！」キャンパス内へのお散歩から子どもたちが帰って来ます。「あ〜いいにおい！おなかすいたね。」今日は週に2回のご飯とお味噌汁の提供日。昆布とかつお節でダシをとったお味噌汁のにおいとご飯の炊けるにおいとが、たっぷり遊んで満たされた思いで帰ってきた子どもたちの身体に染み渡ります。さあ、手を洗って着替えをして、お昼ご飯の時間です。言葉や笑顔を交わり、くっつき合ってお弁当を食べたら、心地よいお昼寝布団へ。目覚めたら、ナーサリー特製手作りおやつを食べ、それぞれに異なるお迎えまでの時間を思い思いにのびのびと遊びます。しっかりと食べることや心地よく眠ることで気力体力を満たしながら、仲間と共に笑い合い、時にぶつかったり泣いたり立ち止まったりしながらの子どもたちの生活が、子どもたち自身によって、こうして日々織り成され積み重ねられていきます。

お茶の水女子大学附属いずみナーサリー（以下ナーサリー）は、生後6ヶ月児から2歳児（年度内に3歳になる幼児）対象の、お茶の水女子大学在勤在学者のための学内保

育施設です。2002年に、前身である「いずみ保育所」が誕生し、2005年に、単身者向け職員宿舎の管理人室と集会室を改修してできた、今の姿になりました。「いずみ」の名は、すべてのいのちの源であるとして、元学長の本田和子先生（児童学）によって与えられました。保護者が、仕事や授業・研究の必要に合わせて登園曜日を選択できる「日数選択制」と、各保護者の入職・復職、入学・復学等の時期に合わせて入所可能な「随時入所制」の二つが、ナーサリーの大きな特色です。さらに、入所条件を満たしていれば、原則として入所希望者をもれなく受け入れる、ということも、学内施設として果たすべき責務と考え、実行しています。これは、昨今の、特に都心における他の保育施設との小さからぬ差異です。入所条件を満たす希望者の全入を守りつつ、何よりも、ナーサリーで過ごす子どもたちにとってのwell-being、時間・空間・人的物的環境等さまざまな面での質





的豊かさが保たれ、適切な量が保たれた保育施設であり続けたいと思っています。

子どもにより通所日数や入所時期が異なるばかりでなく、一人ひとりの子どもの思い、子どもや保育に対する保護者の願いや心配のありようもいろいろです。私たち保育者は、それらいわば個別に生じる事柄にも丁寧に十分に応えたいと願っています。同時に、いろいろでありながらも、どの子ども、仲間の中、コミュニティの中で、その子らしく豊かに育つことができるよう、連続性や統一性、柔軟性のあるカリキュラムの保証、「子どもが仲間とともに居るからこそいきいきと生活できる場」であることもめざしています。また、子どもたちが仲間の中で育つ姿があることで、大人も育ち、大学というコミュニティが、「幼子もいるからこそ」生き生きと活力のあるものになっていくことに寄与したいと考えます。とても小さな保育施設であるナーサリーですが、保護者や子どもたちだけでなく、つながってくださる多くの方たちや、ふれあうすべての人たちにとっても、風通しのよい、陽の差し込む「いずみ」のような存在でありたいと思っています。



附属学校園での出来事 (2016年10月～12月)

【いずみナーサリー】

10月

- 避難訓練(火災)
- 親子で遊ぼう会
- 熊本への社会的保育実践者派遣

【附属幼稚園】

10月

- 運動会予行
- 運動会
- 4歳児遠足(飛鳥山公園)
- 中西部アフリカ幼児教育研修会参観
- 幼小合同避難訓練
- 誕生会
- さつまいも掘り
- 4歳児親子で遊ぶ日
- 3歳児遠足(大学構内)
- 4歳児保護者子育て懇談会
講師スクールカウンセラー永里先生

11月

- HAPPYもみじまつり
- 避難訓練
- 創立140周年記念式典・記念祝賀会
- 誕生会

12月

- もちつき
- 終業式

【附属小学校】

10月

- 衣がえ
- 避難訓練
- 学校説明会
- 中西部アフリカ幼児教育研修会参観
- 校外学習(4年:清掃工場見学)
- かがみ会バザー
- サツマイモ掘り(3,4年)
- 給食試食会
- 秋まつり(2年)

11月

- 留学生との交流会(6年)
- 校外学習(3年:銚子)
- 避難訓練
- 秋まつり(1年)
- たてわり給食
- 音楽会
- ダイコン掘り(2,5年)
- 保護者会(各学年)

12月

- 校外学習(6年:演劇鑑賞)
- 終業式

11月

- いずみナーサリー同窓会
- COSMOS・ECCELL 共催企画
「子どもの世界を見てみよう」
- 個人面談
- 避難訓練

12月

- クリスマスあそび
- 避難訓練
- いずみナーサリー教養講座

【附属中学校】

10月

- 前期期末テスト
- 前期終業式
- 秋休み
- 後期始業式
- 身体測定
- 保護者参観週間

11月

- 生徒会選挙
- 1年郊外園(サツマイモ収穫)
- 避難訓練
- 中間テスト(3年)
- 創立記念日

12月

- 中間テスト(1,2年)
- マラソン大会

【附属高校】

10月

- 自治会総会・選挙
- 2学期中間考査
- SGH台北研修
- 3年学力テスト
- 1年農場実習(サツマイモの収穫)

11月

- ダンスコンクール
- 3年学力テスト
- 避難訓練
- 第2回保護者授業参観
- 全日本高校模擬国連大会
- お茶大・筑波大附属高校合同
キャリア講演会
- 創立記念日

12月

- 2学期期末考査
- 東京工業大学ウィンターレクチャー
- 1年 Google 訪問、本田技研特別講義
- 2年進路講演会
- お茶大キャリアガイダンス
- 1年SGH自国文化理解講座 歌舞伎鑑賞
- 2年東工大・チユロンコン大ワークショップ
- 終業式

附属学校園からのお知らせ

キャンパス点描

女性研究者のグラスシーリングを破る ～ 工学系女性研究者がいつそう輝ける社会に向けて ～ シンポジウム／ワークショップを開催しました

2016年12月10日(土) 芝浦工業大学芝浦キャンパスにて、文部科学省科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業(連携型)」の一環として、第一部：シンポジウム、第二部：ワークショップを開催しました。当日は150名以上の参加があり、会場は満席となりました。

はじめに村上雅人氏(芝浦工業大学長)の開会挨拶があり、塩崎正晴氏(文部科学省科学技術・学術政策局人材政策課長)より来賓挨拶を頂戴しました。続いて、羽入佐和子名誉教授(国立国会図書館長・本学前学長)に基調講演いただきました。

第1部パネルディスカッションでは塚田和美グローバルリーダーシップ研究所長より3機関連携による事業の成果報告がなされました。続いて、猪崎弥生副学長、村上雅人氏(芝浦工業大学長)、長野裕子氏(物質・材料研究機構理事)より、各機関の取組と成果について報告がなされ、今後の活動と、さらなる発展への議論が交わされました。



第2部パネルディスカッション(女性研究者のグラスシーリングを破る)

第2部ワークショップでは、ドナ・コスタ氏(三菱ケミカルホールディングスアメリカ社社長)によるビデオメッセージが上映されました。

パネルディスカッションでは、ファシリテーターに坂東真理子氏(昭和女子大学理事長・総長)をお迎えし、パネリストとして菅原悦子氏(岩手大学理事・副学長)、橋本隆子氏(IEEEWIEChair)、室伏きみ子学長、國井秀子氏(芝浦工業大学学長補佐)の4名に登壇いただき、どのようにグラスシーリングを破ってきたのか、どのように偏見を破るかなど、活発な議論が交わされました。



第1部パネルディスカッション(連携の成果を次につなげる)



羽入佐和子名誉教授・前学長(基調講演)

お茶の水女子大学附属幼稚園が 創立百四十周年記念式典を挙行了しました



祝辞を述べる角田課長



和太鼓の演奏

お茶の水女子大学附属幼稚園は、1876年に日本で最初の官立幼稚園として開園され、創立140周年を迎えました。これを記念して、11月26日(土)に、角田喜彦氏(文部科学省高等教育局大学振興課長)、伊藤学司氏(文部科学省初等中等教育局幼児教育課長)などの来賓を迎え、室伏きみ子学長をはじめとする大学及び附属学校関係者の出席のも

ケネディ駐日米国大使が 本学を訪問されました

2016年12月12日(月)、ケネディ駐日米国大使が本学を訪問され、学生・若手研究者との懇談や、研究室、文京区立お茶の水女子大学こども園の見学をなさいました。

大学にご到着された大使は学長室にて室伏学長、榊原理事・副学長、佐々木副学長らとご挨拶された後、貴賓室に移られ、10人の学生・若手研究者からの研究や将来に関する英語によるスピーチをお聞きになり、永瀬伸子学長補佐やグローバルリーダーシップ研究所カレン・シャイア特別招聘教授のモデレートのもとで意見交換をされました。大使からは日本の女性政治家について若い人はどう思うか、日本ではどのような多様性があるのかなど質問があり、懇談会は予定時間を超えるほどの盛り上がりを見せました。

続いて訪れた生活工学共同専攻の研究室では大学院生による説明を受けながら、実際に歩行機能を測る特別な靴を履いてデータを検証されたり(太田教授、専門：人間医工学)、日本の浴室設計に役立つ入浴介護のモーションキャプチャー技術デモンストレーション(長澤准教授、専門：建築学)を見学されました。

最後に見学された文京区立お茶の水女子大学こども園では、園児



学生・若手研究者たちとの記念写真

たちの使うおもちゃや園児たちの生活などに関心を示され、宮里園長や私市施設長に質問されていました。

ケネディ駐日米国大使から本学の学生の印象として“smart, funny, interesting, charming, and inspirational” との大変好意的な評価をいただき、また次世代の女性たちにとっても期待しているとの激励をいただきました。



太田研究室の研究紹介の様子



長澤研究室の研究紹介の様子



こども園の様子

と、大学講堂にて記念式典が開催されました。

在園児157名とその保護者も参加した式典は、終始和やかな雰囲気の中で進められました。園児たちが歌う「たんじょう日」の歌や、

和太鼓の演奏により「幼稚園の誕生日」を祝い、園舎や園庭、園児たちの日常をとらえた過去と現在の映像により、幼稚園の140年の歴史を振り返り



式典を楽しむ園児たち

ました。大学の歴史資料館では、この日に合わせて「附属幼稚園創立百四十周年記念特別展」が開催され、大学全体がお祝いムードに包まれました。

午後の祝賀会は場所を幼稚園の遊戯室に移し、歴代の園長、副園長、教諭、同窓生たちが思い出を語り合いました。80歳代をはじめとするさまざまな年代の同窓生の思い出話に、本園の長い歴史のなかで護られ継承されてきた日本の幼児教育の理念を再確認することができました。

キャンパス点描



写真：写真部

お茶の水女子大学学報 第251号

▽発行日：2017年2月13日

▽発行：国立大学法人お茶の水女子大学
東京都文京区大塚 2-1-1 (〒112-8610)

ご意見・ご感想はこちらまで

企画戦略課広報企画担当

電話：03-5978-5105

FAX：03-5978-5545

E-mail：info@cc.ocha.ac.jp

URL：http://www.ocha.ac.jp/

本誌、お茶の水女子大学学報「GAZETTE」は、
本学ホームページにも掲載していますので、どうぞご覧ください。